

都市と人間

人間にとって都市とはなにか (1)

岩 男 耕 三

都市は人類文明発祥の地ともいわれ、文明の顔ともみられてきた。

そこでは、紀元前三五〇〇年ごろティグリス、エウフラテス川流域で、巨大なジググラトの上に立つ壮麗な神殿を中心に形成された都市と、そこに生まれた金属工芸、楔形文字の発明などが想起されているのかも知れない。あるいは又、十九世紀以降のかつてない豊かな生産の拠点として、近代技術の粋を集めた高層ビル、高速交通機関を建設し、文学、芸術活動の中心ともなった近代都市がイメージされてもいるのである。

だが、これらは過去五〇〇〇年にもおよぶとみられる都市の歴史の中のある時期に見られた幾つかの事例にすぎないものである。この永い歴史の中で都市は様ざま

に姿を変え、人間とかわって来た。たしかに都市は、農耕社会から脱出することによって、これまでの旧習の絆から人間を解放して、新しい生産・生活様式を創造してきた。これはやがて、生産の発達・人口の増加を媒介にして、新しい住居や道路、水道などの物的生活施設の整備、剰余生産物の貯蔵施設や管理機構建設などの文明の条件となったものである。しかし、この新しい生活様式は又、メソポタミアやギリシアなどに見られたように、他方では森林の濫伐による国土の荒廃をも招いたものであった。都市は文明の象徴であるとともに、また、しばしば人間生活の破壊をももたらしたものであった。

人間にとって都市とは何か。人類の歴史のなかで、都市はいつ・どのようにして形成されたのか。又、時代の

推移とともに、それはいかに変容してきたのだろうか。社会生活の基本的単位のひとつとしての都市は、最近数十年の間に急激に巨大化してその構造、これを構成する諸要素、諸側面もきわめて複雑なものになっているが、その歴史を一貫して流れているものは何か。

人間と都市（社会）はともに、基本的に歴史的存在である。それは時代の推移とともに、さまざまに姿を変えてきたが、にもかかわらず都市を都市たらしめているものは何か。近年の巨大な社会変動の中で、この都市の魂（したがって都市そのもの）は、存続か消滅かの岐路に立っているようにもみえるのである。本稿は、このような観点に立って、最初の都市の成り立ちをふまえながら歴史をたどり、人間にとつての都市の意味を探る作業の素描を試みようとするものである。

本稿は、昨九四年十二月に神奈川大学経営学部で行われた退職記念講演『都市と人間』をもとに稿を起したものであるが、三項目からなる構成の内容の内、当日殆ど論ずることのできなかった第一項「都市の起源」に相当する部分である。したがって、当日講演の基本的観点に立ちながらも、ほとんど新たに書き下すことになった。

一、都市の起源

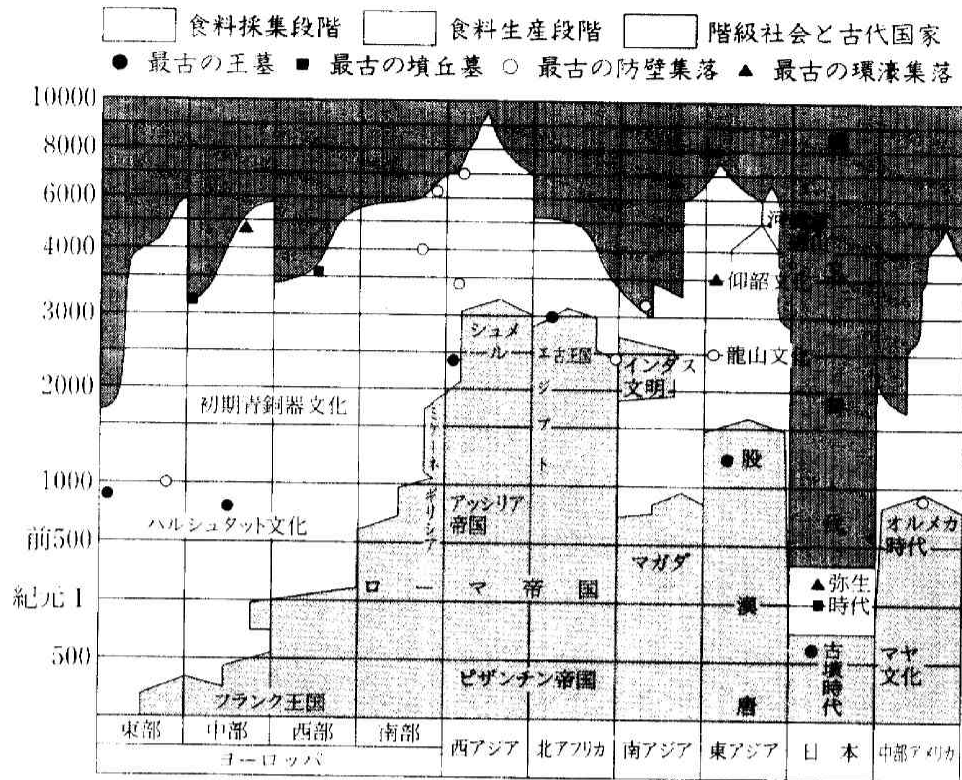
都市は、いつどのような契機をもって生誕したのか。

人類が史上はじめて、それまで存在しなかった新しい社会生活の単位（社会形態）としての都市を形成したことは、それが社会の構造と人間の生活に根本的な変化をもたらし、その後の歴史にも大きな影響を与えたことからみて、きわめて画期的な事件であった。都市の形成は、社会の構造と人間の生活のどのような画期的変化だったのだろうか。

都市は、およそ紀元前三五〇〇年ごろから同一五〇〇年ごろにかけて、四大文明発祥の地といわれるメソポタミア、エジプト、インダス、黄河のいずれも大河の流域で相ついて生まれたとされている。これらは、大河流域の肥沃な土地に恵まれて早くから農業革命（人類の狩猟採集段階から農耕段階への移行）に成功し、灌漑技術を発達させて余剰農産物の生産を実現させたことを、共通の条件にして生起したと一般にみられている。それでは、こうした農業革命の成功が、なにゆえに、都市の形成に決定的な意味をもったのであろうか。ここでは、これまでの考古学、人類学などによる遺跡にもとづく研究に依拠して、メソポタミアの場合にこの関連を考察してみよう。

農業革命、すなわち植物栽培の開始は、それまで広大な土地で狩猟採集によって獲得してきたと同じ量の食糧を、ずっと小さな面積で計画的に育てることを可能にし、食糧の確保を格段に安定させることになった。そし

てこのことは、人間と社会のあり方に重大な変化をもたらすことになった。まず第一に、このような栽培の開始によって「人間は、生物的自然界をその増殖の法則の知識を通じて制御し、それによって外的条件からの新しい



世界文明年表

【注】ドイツ民主共和国科学アカデミー『世界史—封建主義形成まで—』1977原図より
 出典：佐原 真『日本人の誕生（大系日本の歴史①）』1993、P.411、小学館

はるかに大きな独立性を獲得」(傍点原文)することになった。農業生産は、基本的には有機的な自然循環の中で行われる人間と自然との共生関係であるが、この関係は採集段階のそれとは異なって、他方では同時に、人為的制御を加えることによって、自然的物質循環からのより人間的な共生への上昇を意味する。かくして、農耕社会の成立は、人間と自然との関係を二度とあと戻りできない新しいそれに転換させたのである。これは、都市成立の基本的条件の一つを準備したものであり、さらに強化されて都市の本性を構成するにいたる。第二に、栽培の開始は、同じ土地で扶養できる人口を格段に増大させ、やがて道路、水道、広場などの装置をもつ新しい種類の大聚落を生みだすことになった。

こうして農業革命は、人間と自然との関係に、また社会の構造に重大な歴史的变化をもたらしたが、さらに今ひとつ、人間の人間化(自己転換)にも新しい段階を画したことに注目しなければならぬだろう。L・マンフォードはこの変化をとくに重視してその意味を次のように述べている。

「たぶん旧石器時代の最後期、そしてほとんど確実に新石器時代の前に、動物から人間への転換がもう後戻りしない点に達しただけでなく、人間としての発展に必要なすべての主要発明までが達成された時点が

あらわれた。言語、表現的芸能、道徳性、火や刃物の使用、伝統的知識の集積がそれであり、これらの発明は、肉体的存続だけでなく、社会的連続をも確実にするのに十分な条件であった。人間は、彼自身の自己転換の主要手段として、またその転換のいつそうすすんだ副産物として、自分自身の種の永続だけでなく、真善美、用の発展にも関心をよせるような動物に自身を転換させたのであった⁽⁴⁾。

「…人間的定住をもたらしたのは、作物の栽培であった。定住とともに、人間の生活は、いままでになかった空間と時間上の目に見える連続性をもつようになった。村落に集まって生活する諸家族からなる安定した、このような集団は、彼らの共同の努力によって、いつそう安定した食糧供給をかちとただけでなく、生殖や生まれた子どもの保育的管理やさまざまな養育へのいつそうよい設備をもちとった⁽⁵⁾」。

定住生活を通して人間は、狩猟採集の時代には困難であった時空に連続する「社会」と共同を自覚するにいたった。社会と社会的人間の成立であり、同時にそれは、人間の自己転換であった。

「原初人が形成されたのは、新石器時代の村落においてである。そして彼らの文化の諸特徴は、十九世紀の終りまで、慣習のなかで生きつづけ、農業それ自身

と同じほど広い範囲に分布している。現在でさえ、人類の五分の四は、まだ新石器時代の村落の場合とほぼ似かよった物質的条件的もとで暮している」⁽⁶⁾。

農耕の開始と定住は、以上のごとく、社会と人間の、そして人間と自然の関係の一大変革であった。それは又、地球上に「土によって生きる民」⁽⁷⁾を大規模に生み出した。都市は、このような変革を基盤にして、その上に、新しい社会類型として形成されたものである。したがってこれらの変革を引きついで、しかし、土との関係は切断して出発したのである。

歴史に登場した最初の都市の形成については、ふつう次のように説明されている。さきにも述べたように、最初の都市は旧大陸ではいずれも、ティグリス、エウフラテス、ナイル、インダスなど大河の流域に発生した。それは、肥沃な土地を条件にして早期に農業革命を遂行し、さらに灌漑技術を手に入れることを介して余剰農産物の生産に成功して、都市を構成すべき非農耕人口を養うことを可能にしたからである。メソポタミアを中心とする大河流域に形成された最初の都市をモデルにして、このように、余剰農産物の生産を条件とする非農耕社会の成立を都市形成の基礎過程とするものである。だが、この余剰農産物の生産は都市成立の必要な条件である

が、他方、壮大な神殿を中心として城壁をめぐるした大規模な都市を築かせた積極的な契機は何であろうか。

これについては、たとえば、都市に強い関心を示していたW・ゾンバルトは、積極的な都市形成の契機（都市形成者）を、第一次・第二次の二つの範疇に分けて、第一次的形成者すなわち都市形成の主導者（「本来の都市創設者」*eigentliche Städtegründer*）を、権力、財産、生産的活動等なんらかの権原にもとづいて、自主的に自己および他の人びとの生計に必要な土地の余剰生産物を収取する能力を具えている人々（たとえば租税徴収権をもつ国王、貢租を収受する領主、異邦人との交易により利潤を稼ぐ商人、等々）とした¹⁸⁾。しかし他方では、このような世俗的権力ではなく、宗教的権威による組織力をそこに見ようとする見解も有力である。たとえばメソポタミアでは、神殿は同時に政治・経済の中心でもあったが、そこでの王は神の代理人として生産を管理したという意味においてであったとする。J・D・パナールの説明はその一例であろう。

パナールは、「…都市が建設されるためには、その前に農業技術の水準が高くなって、都市の非生産者をその余剰によつて養うことができるようになっていなければならぬ。…そのような農業技術には、そもそもある程度の中央組織が必要である。このことは、多数の村落を

管理する行政者団を必要としている。それらの村落のうち主導的なトーテム神の神殿をもつものが当然都市となり、他の村むらからの余剰生産物がそこへ集められ貯えられたであろう。…都市は最初は、その地域の灌漑を指図し組織したその地域第一の水の魔術師の村から起ったのかも知れない。…」¹⁹⁾とした。

物的な遺跡が遺される神殿建築、墳丘、集落、住居などどちがって、都市形成にかかわる人びとの行動や管理、支配・従属の関係などの事実を直接に確認するのは至難であり、今後も永く、これらをめぐる関連資料の発見を一つ一つ積重ねるほかないであろう。

これに対してメソポタミアでは、ひとたび都市が形成されると、すでにウルク期（前三五〇〇年ころ）には文字が発明され、楔形文字を刻んだ彫大な量の粘土板文書が遺された。その内容は、少数の政治関連文書、宗教文書、文学作品などの他ほとんどは廣義の経済文書であり、大規模化した神殿経済、灌漑農耕の管理にすでに記録を必要とするにいたっていること、また、農民のほか鍛冶、金属細工師、大工、陶工など多様な職業分化が進んでいたことなどが示されているという²⁰⁾。そこにはすでに、中枢管理機能の形成、分業の発展など、今日にいたる都市の原形がうかがわれるといつていいだろう。

「都市は自然を征服した人類の文化的象徴であつ

た」⁽¹⁾。しかしこのことは、人間の自然への裏切りであり、さらに、自己(の内的自然)への裏切りでもあることを意味していた。ゾンバルトが、「都市的定住(Städtische Siedlung)は自然に対立する定住形態であり、自然の裡への精神の投企であり、母なる大地から離脱し、自然に強制を加える定住形態である。…かかる定住形態の拡大たる都市化の傾向は、すなわち、人間歴史の内容を形成する合理化、精神化、自然の霊魂ならびに根幹からの人間の脱却という、かの一般的過程の一側面をなすものに他ならない」⁽²⁾と語ったのは、このことを指摘したものである。(一九九五・二・一〇)

(いわお こうぞう/教授)

注

- (1) J・D・バナール、鎮目恭夫訳『歴史における科学』(決定版) 第一分冊、昭和四二年、みすず書房、五三ページ
- (2) 拙稿「地球の自然と人間の活動」(神奈川大学評論、第八号) 一九九〇年、一〇九ページを参照されたい。
- (3) 新石器時代という時代概念は、精巧な磨製石器の使用だけでなく、農作物の栽培、食用家畜の飼育、土器の使用などをもその文化の特徴とする時代をさすが、ヨーロッパ、西アジア、中国など地域によって、これらそれぞれの出現に時期の違いがあるため、今日一般

には「食糧生産段階に入った石器時代」として使用されるようになった、とされる。(佐原真「日本人の誕生」(大系日本の歴史①一九九二、小学館) 九七ページ)

- (4) Lewis Mumford, *The Transformation of Man*, 1956 (久野収訳『人間—過去・現在・未来—上』一九七八、岩波新書、四九ページ)
- (5) 同上、五二〇五三ページ
- (6) 同上、五九ページ
- (7) Alvin Toffler, *The third Wave*, 1980 (徳岡孝夫監訳『第三の波』一九八二、中公文庫、四〇ページ)
- (8) W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, 1921, Bd. I. I. Hälfte, SS. 131~133.
- (9) J・D・バナール、前掲書、五九ページ
- (10) 小川秀雄『古代のオリエンツ』(世界の歴史2、一九八四、講談社) 三〇〇三三三ページ
- (11) 柴田徳衛『現代都市論』第二版、一九七六、東京大学出版会、三七ページ
- (12) W. Sombart, "Städtische Siedlung, Stadt, "Handwörterbuch d. Soziologie. 1931, S. 527